

～巻頭言～

「神が働かれる余白」

鳩を売る者たちに言われた。「このような物はここから運び出せ」 (ヨハネ2:16)

酷暑の中、いかがお過ごしでしょうか。自分で計画を立て有益に自由に過ごせる筈の夏休みが、あっという間に終わってしまって後悔したことを思い出します。しかし今になると、無為と思われた時間であってもその余白の働きを信じ、その時に必要と感ずることに、もっと堂々と時間をかけていけばよかったと思います。

作者の能力や努力だけでは芸術も文学も生まれず、作者にできるのは、余白を生みだし、人物や筆が自由に動き始めてくれるのを待つことなのだ、とききます。

そんな時、イエス様が神殿にはいり、縄で鞭をつくって羊や牛を境内から追い出し、両替人の金をまき散らした宮浄めの出来事を思い出すのです。なぜイエス様は売り買いする人を追い出し、鳩を片付けるように命じられたのでしょうか。それは神殿を利己的な商売の場所にしたことに怒られただけではないと、神学者エックハルトは言うのです。「イエス様は、神殿(人間の魂)を空にしておきたかったのだ、人の魂を願いや意図で一杯にするのではなく鎮めて、余白を生み出し、神が働ける場所を作るようにしたかったのだ」という言葉を聞いて、はっとしました。

無駄に費やしたと後悔することの多い現代です。しかし全ての余白の中にこそ働いて、私達を生かして下さる神を信じ、祈り、楽しんで賭していければと願います。

牧師 大月 康子

「それぞれの祈りをのせて」

女性会 I. S.



広島教会「おりづるプロジェクト」第1弾を7月20日に終了しました。

「被ばく80年」という時の流れが今更のように心にしみます。どなたでも祈りを届けることができるこのプロジェクトに、教会で残って作成に加わってくださった方、自宅で作成してくださった方など、賛同してくださった皆さんに改めて心から感謝いたします。

今なお被爆の後遺症に悩む方々、いまだ収まらぬ戦火に苦しむ人たちの思い、平和への願いが折鶴となって羽ばたくこのプロジェクトは、続いて第2弾が11月まで続きます。

小さな紙の鶴に、次はどんな祈りを託しますか。

(編注：400羽弱の折鶴を広島教会へ送ることが出来たそうです。)



証し

S. M.

私は大阪の豊中で幼少期を過ごし、母が教会へ通っていたので、物心ついた時には神様を知っていました。小学2年の時母の実家の岡山へ帰り、近くに教会がなかったこともあり、教会生活からは遠のいていきました。それから教会(岡山ナザレン)へ行くようになったのは社会人になってから。毎週水曜日の夜は青年の学び会があり、聖書について学びました。次第に私は自分の事ばかり考え、傲慢になっていました。感謝する気持ちも忘れて悔い改めないといけないと思い受洗しました。

マタイによる福音書11章28節「すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに來なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」ペテロの手紙第一5章7節「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心に掛けていてくださるからです。」このみことばはその当時私の支えになりました。

その後、主人と出会い結婚して3人の子どもに恵まれました。また幸せなことに子どもたちも私と同じようにCSで学ばせて頂きました。その子どもたちも高校生に、1番下は中学に入りました。思い悩む時は教会で祈りたいと自ら教会へ行く祈る姿に神様がいつもいてくださっていることに感謝しています。

仕事の方もフルタイムで働けるようになり、今も介護の仕事が続いています。今勤めているところはケアハウスで、1人で暮らせない方が生活できるように生活支援する施設です。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」テサロニケの信徒への手紙5章16-18

いつもこのみことばに支えられています。職場でつらいことがあった時は、お風呂掃除をしながら大きな声で賛美します。讃美歌「いつくしみ深き」をうたっていると気持ちが落ち着き元気が湧いてきます。神様は私を通して、癒しと祝福を入所者にも届けられているのではないかと。私はこの施設で働いている事も神様のご計画の中なのかもしれません。

いつも感謝して、スマイルで、日々を楽しむこと、これからも神様と繋がりながら、息子たちも小さな信仰の種がいつか開く日が来ますように、陰ながら祈ってきたいと思います。



寄稿

イエス様の眼差しと愛(当たり前過ぎる真実)

日々の診療でいつも問いかけている言葉があります。「イエス様、イエス様はどのような眼差しで私の患者さんを見ておられるのですか？」

入院された方の中には、理不尽な重い人生を負わされ、更になんと言ふ不治の病を患い、心を閉ざされておられる方がいらっしゃいます。通り一遍の優しい言葉や痛み止めの薬だけでは、心を通わすことは出来ません。けれど、キリストに倣い“こころを込めて”ひたすら寄り添い続ける中で、患者さんと心触れ合う瞬間があるようです。その人の価値観やその人らしさなどの理解を越えて“その人自身”と心触れ合う瞬間です。

このような“瞬間”に励まされ、やっと心が通い、その人らしさを支えるケアをすることが出来ると思った矢先、お看取りとなることがあります。寄り添うことに心を注げば注ぐほど、お別れの際には、悲しみでスタッフの心は折れそうになります。

あるクリスチャン・ボランティアの方に「院長、どうして救世軍清瀬病院のスタッフは心が折れずに、新たな患者さんに寄り添い続けることが出来るとお考えですか？」と問われ、私は答えに窮しました。「院長、それは神様が救世軍清瀬病院のスタッフを愛しておられるからです！」それは、思いもよらない新鮮な福音でした。主よ、あなたはあなたを未だ知らないスタッフにも患者さんにも目を向けられ、愛しておられるのですね(当たり前過ぎる真実)。ハレルヤ！！

(編注:PBA 伝道テレビ番組・ライフライン(7月5, 6日)で放送されなかった部分とのことです。)

H. D.

